

総務常任委員会行政視察研修報告書

総務常任委員会では、令和元年11月19日～21日の3日間の日程で長野県小布施町・石川県輪島市・富山県富山市を視察してまいりました。参加者は、鈴木恒充委員長、若見孝信副委員長、大河原千晶委員、永井孝叔委員、渋井康男委員及び執行部職員1名、事務局職員1名です。

最初の視察先、小布施町では「市民協働のまちづくり(小布施若者会議)」について、翌日訪問した輪島市では「輪島KABULET」について、また富山市を訪問し、「SDGs未来都市」についてそれぞれ研修しました。

長野県小布施町

○「市民協働のまちづくり(小布施若者会議)」について

11月19日は長野県小布施町役場を訪問しました。

小布施町は面積19.12平方km、人口11,062人、長野県の北東に位置する町。東部は高山村に、西部は千曲川を隔てて長野市に、南部は松川を隔てて須坂市に、北部は篠井川を隔てて中野市に隣接しています。葛飾北斎をはじめとする歴史的遺産を活かした町づくりで人気を呼び、今や北信濃地域有数の観光地として認知度も高くなっています。

現在は、果樹栽培が盛んな農村として、美しい自然環境に恵まれ、人間味豊かな地域社会を形成しています。特徴ある風土を活かし、先覚の残した文化遺産を継承、発展させ「北斎と栗の町」「歴史と文化の町」として全国から注目され、近年は「花の町」小布施のコンセプトを加え、たくさんの人が訪れる町となりました。

「小布施若者会議」は2012年～2018年の間で6回開催しており、現在の日本が抱える課題の解決につながる新たなモデルを、小布施町から発信していくことを目的にし、開始されました。若者同士がともに主体的に企画・運営していくことで信頼関係を構築し、新たなコミュニティやネットワークの創出、拡大を図り、町民・経営者・行政と継続的に関わりから、将来的に移住、定住につながることを期待しているそうです。

「小布施若者会議」を始めたきっかけは、少子高齢化、人口減少が進む中で、長期的な視点に立って、若者をターゲットにした取り組みが必要であるところからだそうです。そこから、まちづくりインターンシップ事業(国土交通省補助金活用事業)を実施し、まちづくりへの関わりを望む大学生等が2010年から2年間かけて若者会議

の企画づくりを72名で開始し、町内外の民間企業や、新たな学生メンバーも加わり2012年に第1回の小布施若者会議を開催しました。

現在までに、6回開催していますが、議題と企画目的は1年ごとに変わるそうです。小布施町若者会議の成果・課題として、①社会参加意欲の高い若者や企業における認知度の向上、②移住者・定住者の獲得、③小布施町を深く知る若者ネットワークの全国・全世界への広がり④プロジェクト創造と継続性・実現性の課題などがあげられるそうです。第6回まで開催してきた「小布施若者会議」ですが、2018年に開催された第6回で町の主催での実施は終了とし、当面次回の実施予定はないとのことでした。

印象的であったのは、小布施町議会議長の発言で、「観光客は一過性のものであり何度も小布施に来ない、小布施では『観光客』ではなく、『来訪者』と呼んでおり、交流する人と考えている。」との言葉でした。小布施町のファンになってもらう関係人口の増加を目指しているとのことでした。

現在、小布施町は来訪者が年間100万人以上いるそうです。また、小布施町は江戸の昔から訪れた、画人や文人(葛飾北斎や小林一茶)が多くの作品を残しており、歴史、文化のまちとして古い建造物を利用しながら約40年前から独自のまちづくりに取り組んできたそうです。

小布施町 研修風景



石川県輪島市

○「輪島^{カブレット}KABULET」について

11月20日は石川県輪島市の「輪島KABULET」を訪問しました。

輪島市は面積 426.32 平方km、人口 26,582 人。

能登半島の北西にある輪島市は、豊かな緑と海に囲まれた人口約3万人の町です。中世に曹洞宗の本山「總持寺」が開かれ、北前船の世紀には「親の湊」と呼ばれ海上交通の要衝として栄えるとともに、江戸中期以降は漆器業(輪島塗)が盛んになりました。現在、「漆の里」「禅の里」「平家の里」の3つの里構想を前面に、町の魅力を発信しています。

地方創世のモデル社会福祉法人佛子園(ぶっしえん)の、時代を先取りした福祉のまちづくり「輪島KABELET」の内容についてであります。市内にサービス付き高齢者向け住宅、障がいを持った方のグループホーム、障がい者向けの短期入居住宅を「ごちゃまぜ」にし、温泉、カフェ、食堂、売店、ものづくり等、空き地・空き家を利用して起業しました。地域の人(ボランティア)と共存共栄しながら、触媒による多世代交流により、地域住民の健康づくりや、コンパクトなまちづくりに取り組んでいます。現在、全国で6か所運営しており、これからも取り組んでいきたいということです。また、高齢者のユータウンの受け皿にも役立っており年齢や役割など、障害の有無をこえて運営することにより、予想もしなかった奇跡が生まれるそうです。ある日、認知症のおばあちゃんが、車椅子の全身性障害者にスプーンでぶるぶる震える手でゼリーをあげていた。それが日課になって、自宅で夜一人で歩きまわることがなくなったそうです。それからおばあちゃんは、「あの子は私がおらんと駄目なんだ」と言って、毎日食べさせているとのこと。スタッフは認知症の症状が改善する傾向が表れ、大変驚いているそうです。これからも生涯活躍のまち、先進モデルにしたいということで、「ごちゃまぜ」が縦割り行政を変えたということです。

最後に施設スタッフの言葉の中に、仕事に対しては制御するのではなく、信頼して任せることだそうです。

輪島市 研修風景



富山県富山市

○「SDGs未来都市」について

11月21日は富山県富山市役所を訪問しました。

富山市は面積1,241.77平方km、人口418,616人。

富山県の県庁所在地で、同県の中央部から南東部に位置する。富山県の29.24%の面積を占め、一つの市町村が県に占める面積の割合としては全国一です。市域は富山県域に対して南北にわたっており、日本海と南側の県境いずれにも接しています。広い総面積に対し、可住地面積比率は38.2%で、市域の約6割が林野地となっています。また、市街化区域面積比率は5.8%であり、環境モデル都市の選定を受けてコンパクトシティを目指した都市計画を進めています。また、環境未来都市、国際会議観光都市、国連エネルギー効率改善都市、レジデント・シティに選定されています。

富山市が策定した、「富山市SDGs未来都市計画」では2030年のあるべき姿として「コンパクトシティ戦略による持続可能な付加価値創造都市の実現」を目指す将来像とし、①経済価値②社会価値③環境価値の実現に向け優先的なゴールとして、持続可能な開発目標(SDGs)の17ある目標のうち、経済価値では目標9の産業・技術革新、社会価値では目標3の健康・福祉、環境価値では目標7のエネルギーを設定しています。

また、自治体SDGsモデル事業として「LRTネットワークと自立分散型エネルギーマネージメントの融合によるコンパクトシティの深化」に取り組み、経済・社会・環境面で様々な取り組みを行っているそうです。具体的な取り組みとして、経済面では「えごま6次産業化推進事業」「農山村低炭素化モデル事業」の2事業、社会面では「富山駅周辺地区南北一体的なまちづくり事業」「LRTネットワーク形成事業」「生活交通対策事業」「交通空間賑わい実証事業」「首都圏レピュテーション向上事業」「健康長寿コンシェルジュサービス事業」「ICT活用認知症高齢者検索支援事業」「拠点まちづくり支援事業」の8事業、環境面では「木質バイオマス利用計画策定事業」「未来に繋ぐ小学生植樹体験事業」「呉羽丘陵・フットパス検討事業」の3事業に取り組んでいるそうです。

また、これらの3側面をつなぐ統合的取り組みを①個別事業分②全体マネージメント・普及啓発分の2つに分け、様々な検討・実証を行っているそうです。

しかしながら、全国調査によると中小企業のSDGsの認知度は15.8%であり、またSDGsという言葉を知っている人は16%、SDGsは知らなかったが、知らず知らずに多くの目標に取り組んでいた、自治体が数多くみられるということです。

富山市 研修風景



以上、総務常任委員会は、長野県小布施町、石川県輪島市、富山県富山市の3町市について行政視察を実施しました。市民協働のまちづくり、輪島 KABULET、SDGs 未来都市への取り組みなど、さくら市としてこれから取り組んでいくべき事業への参考となる、大変貴重な行政視察となりました。